



100人以上の中学生ボランティアが自治会などのブースをお手伝い。若い力は餅つきでも大活躍。



20人以上の子どもたちの有志が集まり、地域の神輿を担ぐ。額に大粒の汗を輝かせながら、夏祭りの会場に神輿は進む。



みこし 神輿がつなぐ絆 子どもたちを 地域で育てる



interview



いなむらコミュニティ推進協議会 会長
相馬 剛 さん

地域へのボランティア活動に力を入れる黒磯北中学校本部。
夏のいなむらまつりには多くの中学生の姿が。
長年、学校と連携した地域づくりを進めてきた
いなむらコミュニティの取り組みを紹介する。

神輿を担ぐ声、夏祭りの会場に響き渡る。大人に混ざり、負けじと神輿を担ぐ子どもたちの額には、大粒の汗が輝く。8月4日、いなむらまつりの会場には、今年も多くの子どもたちの姿があった。「神輿を担ぐと、不思議と一体感が生まれてさ。彼らの真剣な姿を見ると感動するよ」。いなむらコミュニティで10年以上会長を務める相馬会長は嬉しそうに教えてくれた。

今では恒例の神輿も、十数年前までは長らく倉庫に眠る時期が続いていたという。重厚なその神輿が作られたのは30年ほど前。大勢の担ぎ手を要したが、徐々に地域の人手は減り、他の地区から集める担ぎ手が増加。しかし、他の地区から集めるには費用が必要で、その経費は次第に祭りの予算を圧迫し、20年ほど前に神輿は祭りから姿を消した。「神輿を復活させたい。地域の人だけで担ごう」。周囲に呼びかけ、神輿は再び表舞台に登場。子どもたちも加わり、今年も20人以上が参加した。また、100人を超える中学生が祭りに協力。今では、地域と学校の交流が盛んに

なつた稲村地区だが、かつてはそれほどではなかったという。

地域で取り組む子育て

交流のきっかけは、稲村小学校35周年のモニメント作り。当時、PTAの役員だった相馬会長は「学校だけでなく地域と一緒に取り組もう」とコミュニティに協力を要請。翌年の夏祭りにはPTAでブースを出すなど、徐々に交流の輪が広がっていったという。そんな時、県内で発生した児童誘拐事件。「子どもを守るために地域で何かできないか」。危機感を抱いた当時の校長と相馬会長は、同じ思いの保護者や地域の人と「見守り隊」を結成。有志が立ち上がり、送迎や登下校の見守りを始めた。その活動は自治会の協力も得ながら、スクールガードへと引き継がれ、今も続いている。

当時は、子どもへのあいさつを控える風潮が強かったが、今では子どもたちからしてくれるように。毎日ガードから「今日はあの子がいない。風邪ひいたのかな」と心配する声が聞かれるなど、良好な関係が築けて



「見守り隊」の活動を引き継いだスクールガードが、現在も子どもたちの下校を守っている。

いるという。「よその子どもではなく、地域の子どものという感覚。地域で子どもを育てている」と相馬会長は満足気だ。

「子どもたちが成長し、外に出ても、故郷として胸に残っていてほしい。もし、ここに戻ってきて、地域の担い手になってくれたら最高だね」。活動への思いを尋ねるとそう答えてくれた相馬会長。「もっと多くの人に祭りに来てほしいし、地域と一緒に盛り上げてくれる仲間も増えてくれれば」。そんな期待を胸に、これからも子どもたちのため、地域のために奔走する。

—— 終わりに ——

ゲームやスマホなど、遊び道具があふれている現在。かつては、自ら遊びを考え、地域をかけ回って遊んでいた子どもたち。おじいちゃん、おばあちゃん、近所のおじさん、おばさん。多くの大人に囲まれて、豊かな心やふるさとへの愛が育まれてきた。クラブ活動にスクールガード、そして地域のお祭り。地域学校協働本部をきっかけに、地域と学校の連携を深め、子どもと大人の交流を増やしたい。お祭りに行ってみたり、子どもたちにあいさつしたり・・・小さな積み重ねが、子どもたちを健やかに育て、豊かな地域を創っていきます。あなたにもできることが、きっとあります。小さな一歩を踏み出してみませんか——